



## INDEX

第53回 ヒューマニティーズセンター・オープンセミナー  
東アジアの「開発」と「発展」  
—日・中・韓の開発研究を比較する—

- |   |            |
|---|------------|
| 1. 発表に先立って——「比較」の難しさ                    | 佐藤 仁       |
| 2. 発展・開発知の国籍問題<br>—日本の場合—               | 佐藤 仁       |
| 3. 中国の開発研究とその先<br>——「共同」から「共通」へ         | 汪 牧耘       |
| 4. 韓国社会を視る万華鏡としての<br>「開発/개발」と「発展/발전」の研究 | KIM Soyeun |
| 5. 質疑応答                                 |            |
| 6. セミナーの議論から生まれてきた問い                    |            |

第78回 ヒューマニティーズセンター・オープンセミナー  
日本型援助理念 (Ideas) を問い直す

- |           |                   |
|-----------|-------------------|
| 1. 問題提起   | 佐藤 仁              |
| 2. 自助努力支援 | MAEMURA Yu Oliver |
| 3. 要請主義   | 佐藤 仁              |
| 4. 開発輸入   | KIM Soyeun        |
| 5. 質疑応答   |                   |

東アジアで考える開発学  
——日本の援助実践を素材に第53回  
ヒューマニティーズセンター・オープンセミナー  
東アジアの「開発」と「発展」  
—日・中・韓の開発研究を比較する—第78回  
ヒューマニティーズセンター・オープンセミナー  
日本型援助理念 (Ideas) を問い直す

佐藤 仁  
汪 牧耘  
KIM Soyeun  
MAEMURA Yu Oliver

# 東アジアで考える開発学 ——日本の援助実践を素材に

## 第53回 ヒューマンティーズセンター・オープンセミナー

### 東アジアの「開発」と「発展」

#### —日・中・韓の開発研究を比較する—

- |   |            |    |
|---|------------|----|
| 1. 発表に先立って——「比較」の難しさ                    | 佐藤 仁       | 2  |
| 2. 発展・開発知の国籍問題<br>—日本の場合—               | 佐藤 仁       | 3  |
| 3. 中国の開発研究とその先<br>——「共同」から「共通」へ         | 汪 牧耘       | 11 |
| 4. 韓国社会を視る万華鏡としての<br>「開発/개발」と「発展/발전」の研究 | KIM Soyeun | 17 |
| 5. 質疑応答                                 |            | 24 |
| 6. セミナーの議論から生まれてきた問い                    |            | 32 |

司会：HMC 特任研究員・祝世潔

## 第78回 ヒューマンティーズセンター・オープンセミナー

### 日本型援助理念 (Ideas) を問い直す

- |           |                   |    |
|-----------|-------------------|----|
| 1. 問題提起   | 佐藤 仁              | 37 |
| 2. 自助努力支援 | MAEMURA Yu Oliver | 41 |
| 3. 要請主義   | 佐藤 仁              | 48 |
| 4. 開発輸入   | KIM Soyeun        | 53 |
| 5. 質疑応答   |                   | 63 |

司会：HMC 特任研究員・祝世潔

- |            |    |
|------------|----|
| 著者紹介 (執筆順) | 74 |
| 編集後記       | 77 |

## 第53回 ヒューマニティーズセンター・ オープンセミナー

### 東アジアの「開発」と「発展」 — 日・中・韓の開発研究を比較する —

2022年2月11日（金）17:30-19:30  
Zoom オンライン開催

#### プログラム

1. 佐藤 仁：発表に先立って —— 「比較」の難しさ
2. 佐藤 仁：発展・開発知の国籍問題 — 日本の場合 —
3. 汪 牧耘：中国の開発研究とその先 —— 「共同」から「共通」へ
4. KIM Soyeun：韓国社会を視る万華鏡としての  
「開発/개발」と「発展/발전」の研究
5. 質疑応答
6. セミナーの議論から生まれてきた問い  
(司会：HMC特任研究員・祝世潔)

# 1 発表に先立って —— 「比較」の難しさ

佐藤 仁

東洋文化研究所の佐藤と申します。それでは発表を始めさせていただきます。  
今日、私を入れて3人登壇者がいるのですが、それぞれ自己紹介を含めてお話しするという段取りで進めさせていただきます。1人20分ずつぐらい話をさせていただいて、たっぷり議論の時間が取れるようにしたいと思います。どうぞよろしくをお願いします。

まず今日の発表に先立って、皆さんの方にお示ししているサブタイトルの方に「比較」という言葉が入っているんですけども、これ、われわれの中で昨日も話し合ったんですが、厳密な比較はすごく難しいってということが、やればやるほど分かってきました。つまり、われわれがテーマにしている「開発」とか「発展」は、「変化」を表すわけですが、この変化とは、社会の変化であって、特定の時空間の文脈の中で生じるものです。そうすると、複数の異なる社会で生じた変化を機械的に比べることは非常に難しいってということがはっきりしてきたのです。

他方で、開発の考え方とか学知のつくられ方は、一定の類似点をもちつつも、それぞれの国や地域が発出した場所とか時間とか、知の環境は、国によってだいぶ異なるわけです。なので、三つの国の比較を厳格に行うのではなく、東アジアの中にいろんなタイプの開発学とか開発研究があることを認め、その多様性を尊重するアプローチでお話ししたいと思っています。もう少し積極的に言えば、比較の難しさそのものは、実は開発という営みの文脈依存性を証明しているようにも思います。なので、「比較」という言葉がタイトルに入っておりますが、こういう方針で臨むということを冒頭でお断りいたします。

## 2 発展・開発知の国籍問題 —日本の場合—

佐藤 仁

さて、私は日本を例に、発展・開発知の「国籍問題」という表現で話題提供させていただこうと思っておりますが、その前に、私自身がどんな研究をやってきたのかを簡単にご紹介したいと思います。

これまで、開発とは何か、資源とは何か、環境保護とは何か、援助とは何か、といった問題を研究してきました。それぞれの成果は、『野蛮から生存の開発論』（ミネルヴァ書房、2016年）、『持たざる国の資源論』（東京大学出版会、2011年）、『反転する環境国家』（名古屋大学出版会、2019年）、そして『開発協力のつくられ方』（東京大学出版会、2021年）にまとめています。

こうした研究遍歴の上に、現在、私が取り組んでいる概念が「依存」です。人間社会は、「開発」の名の下に自立と競争を強調していました。今こそ、依存の肯定的な価値を見直し、人間の依存関係のあり方を新たな視点から構想しなくてはいけないと思うようになりました。私は、この構想を『争わない社会』というタイトルで、2023年5月にNHK出版から上梓する予定です<sup>1</sup>。この本では、権力の一元的な集中が大きな争いの原因になっているという観点から、争いをエスカレートさせない社会のあり方として、中間集団の層を厚くし、人間の依存関係を開かれたものにしていく可能性を論じています。

とりわけ今日の発表との関係でいうと、実は先祖返りしたようなところがあります。私が元々イメージしていた開発とは、一つ正しい開発があるかのような、そういうニュアンスで考えていたんですけれども、もう一度原点に戻って、開発とは何かっていうことに戻ってきたわけです。しかし、その戻り方というのは、これからお話しするように、日本とかアジアに固有の開発というものがあるのではないかと、それがあつたら、それを見定めることに何か意味があるのではないかとという問題意識に帰着すると思っております。

ここで、今日の話題に入っていくにあたって、私が不思議だと思ってきたことを紹介させてください。それは、開発を学ぶために、なぜみんな欧米に行かなく

てはいけないのかということです。私が院生の頃は、開発学という分野は欧米に行って勉強するのが当たり前であると考えられてきました。この傾向は、いまも大きくは変わっていないように思います。

ここから日本で開発を学ぶ意味は、どこにあるんだろうかと考えるようになりました。もっと言えば、開発研究とか開発学に国籍ってというのはあるんだろうか、どこの国で開発を勉強するかっていうことが、中身にどれだけ影響するだろうかと考えたりしました。

後で申し上げるように、日本でも開発学は盛んになってはきているものの、その大部分は、留学生が日本の近代化とか日本の開発を勉強しているのものであって、日本人は外国に行って、欧米で開発を勉強する。そこに何か不思議なねじれのようなものがあると感じています。

もう一方で、欧米の開発理論の教科書を見ると、日本から発信した理論はほとんどなくて、かなり欧米の研究機関が中心になって言論空間を支配していることがわかります。それは果たして英語が支配的な言語になっているということだけの問題なのか、あるいは開発というものは何か一つあるべき姿があつて、そこに向かっていくときに、例えば、キリスト教のような一神教を背景とした西欧の人たちが打ち出す考え方に開発との強い親和性があるのだろうかとか、そのようなことを考えたりもしました。

あともう一つ、私が今いる東洋文化研究所では、地域研究をやっていますけれども、地域研究も開発研究とちょっと似ていて、これまでどちらかといえば、欧米で行われてきた議論をうまく受け止め、咀嚼して日本なりに加工していくことを一生懸命やってきたところがあります。これからは、それにとどまるのではなくて、日本に元々ある土着の概念をもっと対外発信していくってというような Asian Studies Inside Out、つまり Outside In ではないアプローチが必要なんじゃないかと考えています。

私が現在取り組んでいる問いの一つは、日本とかアジアには、独自の開発論をつくるために、どのような素材が転がっているんだろうか。それをどうやって発掘して新しい足場にしていくことができるんだろうかということです。今日これからするお話は、こういった問題関心の延長にある話題となります。

聴衆の皆さんの中には、開発に関する話題に慣れておられない方もいると思うので、そもそも development はどう理解されているかを簡単にご紹介します。

もともと英語の development は、envelop、つまり封筒という言葉と語源が同じで、要するに封を開く、「潜在的なものを発現させていくこと」と理解されてきました。仏教用語では、仏となる性質、つまり、自らの仏性を開きおこし、まこ

<sup>1</sup> 本ブックレット刊行時にすでに出版されています。佐藤仁『争わない社会：「開かれた依存関係」をつくる』（NHK出版、2023年5月）。

との道理を悟ること。元々そこにあるものを展開していく、可能性を開いていくという意味の言葉です。

ただ、実際にこれがどういう文脈の中で用いられてきたかという点、日本には「開化」という言葉も明治時代にありましたが、近代化とか西欧化とか進歩の発想と非常に密接に関わる、単なる哲学的な概念というよりも、実際的な概念として用いられてきたと言えると思います。

欧米と違って日本に特徴的なのは、Developmentに相当する訳語が二つあって、一つは自動詞の「発展」、もう一つは他動詞の「開発」です。Developmentを「発展」と考えるのか、「開発」と考えるのかによって、意味内容が全く変わってくるのが日本で開発を論じる際の一つの特徴だと思っています。

国際開発の領域では、実践的な関心の強い論者が多いので、たとえば先進諸国の平均余命とか教育とか消費の水準に、発展途上国と呼ばれる国を引き上げていくことこそ国際開発であると考えられる傾向があります。ただし、開発援助の動機とは、非常に政治的で、援助が相手の国の人々のためになっているとは限らないというのはご案内の通りです。ゆえにいろんなかたちで批判されたり、批判に基づいて改善が行われたりしてきました。

日本を例に歴史的に見てみましょう。おそらく日本が、今日われわれが開発と呼んでいるような概念に非常に敏感に反応するようになったのは、明治時代の初期だったと思います。福沢諭吉は『文明論之概略』の中で、日本はまだ文明国ではないし、かといって野蛮な国でもなくて、その間にある「半開」の国であると分析しました。このように、ある種の発展段階説を日本に取り入れて、「日本はいまだに開化しつつある国」という自覚を広く普及させたというところが一つの出発点かと思っています。

その後、日本は日清戦争、日露戦争と大きな戦争に続けて勝ったことによって、単に欧米に追い付くというだけではなくて、アジア地域の人々と一緒に西欧に対抗できるだけの国力を作ったわけですから。そして、欧米列強に対抗する動きをリードしていく国民的使命を日本人が担っているんだという論調が、とりわけ日露戦争後ぐらいに非常に明確になります。

そういった議論を展開した人に、徳富蘇峰という人がいます。彼は明治維新の変革期を「国民的自覚の時期」、日清戦争の前後を「帝國的自覚の時期」、日露戦争のときを「帝國的に世界より承認されたる時期」というふうに分けています。極めて日本中心的な発想なんですけれども、このような考え方が当時の日本のエリートの一つの有力な考え方として存在していたことは確認しておきたいと思います。欧米に虐げられた植民地を日本が解放して、新しく開発してやるんだ

というような発想は、このくらいの時代から芽生えたのではないのでしょうか。国際開発という言葉は使われていませんでしたけれども、ここが今日の国際開発の水脈の一つと言えると思います。

当時の知識人が何を考えていたかは別として、一般の人々が開発にもっていたイメージを今に伝える面白い漫画が『冒険ダン吉』です。これは、昭和8年から『少年倶楽部』という雑誌に連載されたもので、『鉄腕アトム』で有名な手塚治虫も、子どものときに『冒険ダン吉』を読んで漫画家を志すようになったと言われてい

ます。『冒険ダン吉』は、ダン吉という日本人の少年がボートの上で昼寝をしていたら、知らない間に、「土人の島」に流れ着いてしまって、その島を開いていく、開発していくという話です。彼は小学校を造ったり、それから、これも今日的な視点から見ると問題のあるシーンですが、土人は色黒で区別がつかないから、体に番号を塗り付けて1号、2号っていうような呼び方をするんですね。あるいは非常によく働いた土人を褒めて、そうでない土人を罰するというような、そういう報奨システムみたいなものを入れたりします。それから、島にやってくる白人を懲らしめる場面もあります。保健所や郵便局を造ったり、さまざまな開発活動をするわけです。インフラを造ったり、灌漑をしたり、そんなようなこともやります。

島田啓三という著者は、いわゆる南の島に一度も行ったことがないということなんですが、この中に今日われわれが開発と呼んでいる活動の、全てとは言えないけれど、かなりのレパートリーがほぼ入っているというのは、非常に驚くべきことだと思います。開発の原初的なイメージを日本国民一般に植え付ける上で大きな役割を果たした漫画ではなかったかなと思います。

第二次大戦が終わると、アジアに対する加害者であった日本では開発とか援助という言葉は使いづらくなります。それでも、戦前には台湾や中国に広がっていた「国土」の4割を敗戦によって喪失した日本は、復興のためにどうしても東南アジアからの原料が不可欠でした。そこで出てきたのが「経済協力」という概念です。

日本は、戦後賠償と経済協力を一つのテコにして、東南アジアに再進出することを画策しました。この具体的なやり方について、政府の方針を議論していたのがアジア経済懇談会というグループです。1953年の会議の議事録を読むと、そもそも会議の組織の名前をどうしたらいいかという議論で、「開発ということは避けた方がいい」という発言や「曖昧な名称がいい」、「協力という表現でも相手国は喜ばないだろう」といった発言が委員たちから相次いで出ています。ここから、



なるべく押し付けがましくない、日本が再侵略をしているというようなイメージを与えないように、ひっそりとアジアに再進出する方法を苦心して考えていたということがうかがわれます。

また、現地事情に詳しくった地域研究者の方も現地で受け入れてもらって研究するためには、やはり政策と距離をおく必要性をみんな感じていたようです。1958年にできたアジア経済研究所（アジ研）も、初代所長の東畑精一は国会答弁の中で、あくまで純然たる研究機関としてアジ研の研究者を派遣する必要性から、政策とか経済協力とか、そういったものからは距離をおくというスタンスを明確にしていました。

そういうわけで、しばらくはなかなか関与の学としての開発学は、日本では育たなかったわけですが、その代わり、今あまり使わない言葉ですけれども、発展学という近代化の研究は非常に盛んに行われました。発展学については、1971年の白鳥令先生という方が書かれた「発展学の構想と問題」(『アジア研究』1971年18巻3号 p. 44-75)という論文が出ていますけど、これは基本的には近代化の説明、あるいは近代化に基づく社会変化の理論の紹介が主な内容になっています。

1960年代から70年代になると、ようやく日本が開発援助というかたちで、堂々とアジア諸国に出ていく時代になります。世界はいわゆる南北問題をどうするんだということで、日本もOECDの一つのメンバーとして応分の責任を果たさなくてはいけない立場になっていくわけです。そのあたりから、いわゆる開発研究とか開発学といわれる知のかたちが議論され始めます。一部で用いられていた発展学という名称は消えていきますが、その代わりに、援助の業界がどんどん予算を増やして、援助にかかわるコンサルタントや研究者が増えて、南北問題、開発援助、経済協力を冠した論文が増えていきました。

他方で、この時代では開発とか発展に関する議論において、日本でそれを議論しているという自覚が少なく、日本人が開発を研究するということが、例えば欧米の人と比べてどういう違いや類似点を持っているのかということに関して、意識的に論じている人がいませんでした。乱暴に言えば、欧米開発論のかなり無批判な輸入がずっと行われてきたということが言えるのではないかと思います。

ここから日本の独自の開発の研究の在り方みたいなのところに向かう話題に移っていきと思うんですが、それに先立って、福沢諭吉の言った「一身にして二生を経る」という『福翁自伝』で使っている言葉を紹介したいと思います。福沢はこの本の中で面白いことを言っていて、たとえば「英書は何でも読めるが日本の手紙が読めないような少年が出てきた」といいます。「物事がアベコベになって、世間では漢書を読んでから英書を学ぶというのを、此方（こちら）には英書を学

んでから漢書を学ぶという者もあった」ということで、彼に言わせれば、ものごとの順序が逆になっていたわけです。

これは冒頭で申し上げた、開発を研究する日本人が欧米の開発学について一生懸命勉強して知っているが、日本がどうやって経済発展したのかについてはほとんど知らない、ということとパラレルな響きを持ちます。

福沢はいわゆる洋学の旗手として認識されているわけですが、そんな福沢ですら、やはり若い頃は、漢学、四書五経をそらんじるような、そういう教育をずっと受けてきた人だということが、ここに表れているわけです。実際に東大の前身である大学南校の入学基準も、「幼年ノ間ハ和漢ノ学肝要ナルヲ以テ十六歳以上ニ非サレハ入学ヲ許サス」ということで、まず和漢を勉強した人が大学に入って洋学を勉強するということが明確にうたわれています。この点は、非常に興味深いですね。

こんな話をなぜ紹介するかというと、当時、一生懸命海外の勉強した人たちも、日本の漢学というのを一つのベースにして、それを比較の参照軸にして外から入ってくる洋学を見ていたということなんですね。比較の土台（＝定見）があるからこそ、欧米の議論を一定程度の距離をおいて咀嚼することができたんじゃないかと私は思っています。

これを今日の私の話題に引き付けて申しますと、では日本の開発学とか開発研究に先立つ定見を、どこに求めることができるのかという点に、この話がつながっていくわけです。

日本の場合、私は幾つかの定見の素材があると思っています。大きく分けて、いわゆる発展学系統と開発学系統です。発展学系統の中では、急速な近代化とその矛盾ですね。農村と都市の格差、公害。こういったものがどんなふうに表示されてきて、その対策がどんな成功や失敗を経てきたのかということは、日本的な開発学をつくっていくときの基礎知識になるだろうと思います。もうちょっと新しい話題でいうと、課題先進国としての経験、少子高齢化とか耕作放棄とか縮小社会とかも材料になるでしょう。あるいは日本における地域研究の伝統ですね。梅棹忠夫の『文明の生態史観』も、英語にならなかったのもあまり世界で話題にはされませんでしたけれど、かなり日本に独特な地域研究からの発信でした。こういったものをどう総括するかっていうのは、日本の発展学系統の定見の材料になるんじゃないかと思います。

また、開発学系統では、日本の植民地統治経験、あるいはそこから発生して出てきた殖民政学は、どういう中身を持っていたのかということも勉強しなくては行けない。あるいは長期にわたる対外経済協力、特にインフラとか、そのプロ

セスにおける官民協力の経験の長さ。それからこの後少し触れますけれども、日本の援助が市民社会から厳しく批判されたというのも、日本の開発の歴史の中の特徴的な部分だと思うんですね。批判が果たした役割っていうものについても知っておくべきだと思います。それから実学との密接な関係、特に土木とか農学と、それから学際性への寛容さを持っていた点も、開発研究の重要な特徴じゃないかなと思っています。

その後、日本の開発学は、いろいろ制度化されてきて、名古屋とか神戸とか埼玉では、国際開発を専門とする大学院が出てきましたが、先ほど申し上げましたように留学生比率が非常に高く、名古屋なんかだと、一番最近のデータで76%が留学生だそうです。

一方で、国際開発学会と称する学会が1990年にできて、現在会員が1,700人ぐらいいます。社会科学系としては大きな学会で、こういった学会ができたということは一つ、ODAが減少している中で、開発学の分野が制度化して安定してきている証左ではないかと思っています。

開発の目標が非常に曖昧化している今こそ、私はこの開発の研究を深めていく必要があるんじゃないかなと思っています。

私の話の暫定的な結論ですけれども、開発学には、いわゆる国籍とまでは言えなくても、地域の歴史的な文脈を踏まえたお国柄ってというのは、どうもありそうです。この後、中国と韓国の事例を聞きながら皆さんにご判断いただきたいんですが、そういった「お国柄」が拠って立つ基盤、要するにどのように開発を捉えるかという基盤が地域の歴史的な文脈によってできていると考えられるわけです。

ところが、未来を見据える材料となるはずの基盤は、実は歴史の転換期で積極的に忘却されてきたという事実が日本ではありました。例えば、戦後の開発に関する知識は、戦前のことは全部忘れましょうというところから再出発している、つまり積極的な忘却が行われてきたと思います。戦前のことも新しい文脈の中で思い出さなくてはなりません。

それから他方で、開発にはお国柄があって、いろんな国の、例えば、イスラムの開発とか仏教的開発とか、いろいろあるとなつた場合に、開発の理想を一つに限定する暴力を多少なりとも低減できるかもしれないと思います。もちろん、そうなれば開発学としての学問的な推進力は、もしかすると逆に弱まるかもしれません。このことをどう考えるかは、一つ私が気にしていることです。

日本の拠って立つ基盤を具体的に構築していくにあたって、今私が、今日いらっしゃるソヤン先生や汪さんとも一緒にやっているのは、英訳の難しい日本の開発概念を検討することです。例えば、「人づくり」とか「現場主義」とか、こういっ

た日本の概念を検討しながら、日本のお国柄を確認していくような作業をやっています。

すみません。長くなってしまいましたので、今日、全体を通して皆さんに問いかけたいものは、後でスライドをお見せすることにして、私の発表はこれで終わります。引き続き、汪さんお願いします。